

創立六〇年に発生する、 日本音楽界、本年最大の”事件“!

富樫鉄火(音楽ライター)

東京佼成ウインドオーケストラ(TKWO)は一九六〇(昭和三五)年に結成された。設立時の団員数は「十五名」。しかも楽器経験者はたった1人。ほとんどが楽譜も読めない若者たちだったが、戦後の日本に新しい吹奏楽の響きを根づかせようとする情熱は、次第に実力となって花開き、団員も増えていった。

一九六〇年代の吹奏楽界といえば、まだ、マーチやクラシック名曲ばかりを演奏していた時代である。しかしTKWOは、それらばかりではなく、一般には知られていない内外のオリジナル名曲を次々と発掘し、初演した。かくして日本吹奏楽界のレパートリーは、一挙に広がったのである。

指揮者陣も、クラシック界のみならず、海外から一流どころを続々と迎えた。そのひとり、一九八四年に同団の常任指揮者に就任した、フレデリック・フェネル(一九四〇〜二〇〇四)である。彼は一九五〇年代に、米イーストマン音楽院でウインド・アンサンブルを結成し、現在のような理想的な楽器編成を確立させていた。さらに埋もれていた名曲を続々発掘。ホルストの《第一組曲》《第二組曲》、さらには、グレインジャーの《リンカンシャーの花東》といった名曲は、フェネルによって広まったといっても過言ではないのだ。

TKWOが創立六〇年を迎えた今年、それらを、同団の正指揮者・大井剛史が、再び甦らせる。特にホルストの《第一組曲》は、フェネル自身が「吹奏楽を指揮するものは、この曲のスコアとともに生活せよ」とまで述べた”聖典”だ。初演からは一〇〇年、いまや古典となった名曲群を、どのように響かせてくれるのだろうか。

今回は、古典だけでなく、吹奏楽最前線の曲も登場する。まずは注目の若手、芳賀傑の《水面に映るグラデーシヨンの空》だ。二〇一八年にフランスで開催された、第六回クード・ヴァン国際交響吹奏楽作曲コンクールで第1位と聴衆賞を受賞した最新名曲だ。

そして、今回最大の注目は、日本音楽界の至宝、保科洋による、TKWO創立六〇年記念委嘱作品、《交響曲第三番》が初演されることだろう。二〇一六年、作曲者八〇歳の記念に書き下ろされた《交響曲第二番》は、「吹奏楽編成で書かれた交響曲の最高傑作」の声もあった。あれからわずか四年、早くも第三番が登場し、しかもそれが、大井剛史&TKWOによつて初演されるというのだから、驚き以外のなにものでもない。まさにこれは、日本音楽界における本年最大の”事件”である。吹奏楽ファンのみならず、すべての音楽ファンが立ち会わなければならない、歴史に残る演奏会になるにちがいない。(敬称略)

大井剛史 (正指揮者)

Takeshi Ooi, Conductor



©K. Miura

1974年生まれ。17歳より指揮法を松尾葉子氏に師事。東京藝術大学指揮科を卒業後、99年同大学院指揮専攻修了。若杉弘、岩城宏之の各氏に指導を受ける。96年安宅賞受賞。スイス、イタリア各地の夏期講習会においてレヴァイン、マズア、ジェルメティ、カラブチェフスキーの各氏に指導を受ける。2000年〜2001年、仙台フィルハーモニー管弦楽団副指揮者。2007年〜2009年、チェコ

フィルハーモニー管弦楽団にて研修。2008年アントニオ・ベドロッチェ国際指揮者コンクールで第2位入賞。2009〜16年ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉(現・千葉交響楽団)常任指揮者、2009〜13年山形交響楽団指揮者、2013〜17年同正指揮者を歴任。現在、東京佼成ウインドオーケストラ正指揮者。このほかほとんどの国内主要オーケストラを指揮し、多彩なレパートリーとその誠実な指揮でいずれも高い評価を得ている。オペラの分野では、在学中より新国立劇場、東京二期会などのオペラ公演で副指揮者を務め、2002年「ペレアスとメリザンド」(ドビュッシー)を指揮しデビュー、以降多くのオペラ作品を指揮するほか、ミュージカル「ウエスト・サイド・ストーリー」(バーンスタイン)も指揮。バレエの分野では「ロメオとジュリエット」(プロコフィエフ)などで新国立劇場バレエ団の公演を度々指揮、国内を代表するバレエ団やダンサーが一堂に会した「NHKバレエの饗宴」でも指揮を務めた。さらに、小松原庸子スペイン舞踊団や、野村萬斎、花柳壽輔、井上八千代といった日本舞踊界の名手たちと共演するなど、幅広い舞台芸術分野で活躍している。東京藝術大学音楽学部器楽科非常勤講師(吹奏楽)。尚美ミュージックカレッジ専門学校客員教授。

保科洋 (作曲)

Hiroshi Hoshina



1960年、東京芸術大学作曲科卒、卒業作品にてその年の第29回毎日音楽コンクール作曲部門(管弦楽)で第1位を受賞する。以後、本格的に作曲活動を進めるかたわら、東京音楽大学、愛知県立芸術大学、兵庫教育大学で教鞭をとり、2001年3月に兵庫教育大学を定年退職する。作品は管弦楽曲、オペラ、吹奏楽曲、室内楽曲、合唱曲、ミュージカルなど幅広いが、特に吹奏楽曲では日本を代表

する作曲家の一人として知られ、作品のいくつかはアメリカでも課題曲に登録されるなど世界各国で演奏されている。特に2008年11月にイタリアで開催された国際ホルンコンクールにおいて本選の必須課題曲に「巫女の舞」(ホルン協奏曲)が選ばれ、世界各国のホルン奏者によって熱演された。指揮活動も「フィルハーモニックウインズ浜松」や「シエナ・ウインドオーケストラ」をはじめ幅広く行っているが、特に、アマチュアを対象とした指導法はそのユニークな演奏解釈理論とともに定評があり、岡山大学交響楽団の常任指揮者を50年以上もの長きに亘って続け、日本有数の大学オーケストラに育て上げるかたわら、客演指揮者としても全国各地のオーケストラや吹奏楽団で活躍している。2017年からは、保科洋指揮法クリニックを兵庫県加東市で主催し、全国のスクールバンドや市民音楽団体指揮者にアマチュア演奏団体を指揮するための指揮法の指導を行っている。このような長年にわたる教育・指導活動が評価されて、平成27年度秋の叙勲において「瑞宝中綬章」が授与された。また、平成28年度春には兵庫県文化功労賞を授与された。兵庫教育大学名誉教授、浜松アクト音楽院吹奏楽部門音楽監督、フィルハーモニックウインズ浜松音楽監督。

東京佼成ウインドオーケストラ

Tokyo Kosei Wind Orchestra



©Atsushi Yokota

1960年(昭和35年)5月、立正佼成会附属の「佼成吹奏楽団」として発足、その後1973年に「東京佼成ウインドオーケストラ」へ改称した日本が世界に誇るプロ吹奏楽団。吹奏楽オリジナル作品、クラシック編曲作品やポップス、ポピュラーまで幅広いレパートリーの演奏を通し高い音楽芸術性を創出し、多くの人々が楽しめる管楽合奏を展開、各地のコンサートで好評を博している。また多くのレコーディング、テレビ・ラジオに出演し、吹奏楽文化の向上・普及・発展に尽力している。2020年に楽団創立60周年を迎え、同年1月より大井剛史が正指揮者、トーマス・ザンデルリングが特別客演指揮者、飯森範親が首席客演指揮者、藤野浩一がポップス・ディレクターに就任。